

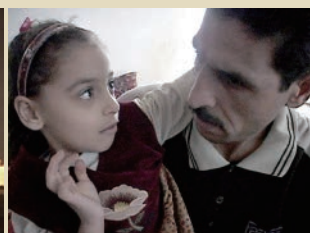
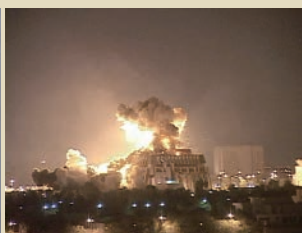
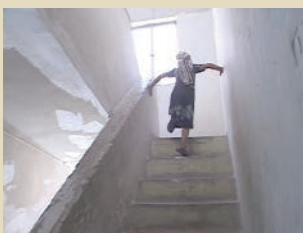
戦争と
人文学

平和のために何ができるのか？

映画や文学などの芸術は、つねに「戦争」を描いてきた。ほとんどの世代が戦争を知らないこの国で、いかに「戦争」を表現し、そのリアリティを伝えるのか。人文学には何ができるのか。イラク戦争のドキュメンタリー映画をとおして、学問／大学の役割を問いなおす。

第I部
綿井健陽監督作品

「Little Birds ～イラク 戦火の家族たち～」 上映会



(C)YASUOKA FILMS All Rights Reserved

第II部
トークセッション：
戦争を知らない世代が語り合う戦争と平和
ゲスト 自由と平和のための京大有志の会・発起人 藤原辰史



2016

7/26

火

入場無料・申し込み不要

17:30-20:00

岡山大学津島キャンパス
文法経講義棟・20番講義室

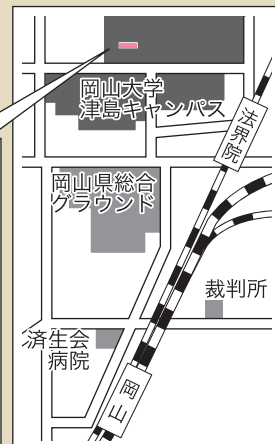
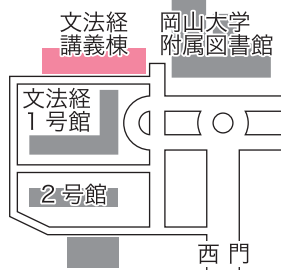
● バス ●

岡山駅西口バスターミナル22番乗り場から
【47】系統「岡山理科大学」行きに乗車。
「岡大西門」下車。(約7分)

● 電車 ●

津山線「法界院」駅より徒歩約10分。

岡山大学津島キャンパス
文法経講義棟20番講義室
〒700-8530 岡山市北区津島中3-1-1



主催：岡山大学文学部プロジェクト研究・映像表現と人文学
問い合わせ先：松村圭一郎（岡山大学文学部）visualhumanities@gmail.com

映画紹介

「Little Birds ～イラク 戦火の家族たち～」(2005)

米軍によるイラク侵攻が始まった2003年3月、ビデオジャーナリスト綿井健陽はバグダッドにいた。「ニュースステーション」「NEWS23」などで精力的にイラクからの中継レポートを続けていた綿井健陽は、日本のマスメディアが引き上げていくなか、現地に留まり続ける。そして、約1年半の取材期間を費やし撮影された123時間余りの映像から、102分のドキュメンタリー映画を完成させた。空爆で3人の子どもを奪われた父親アリ・サクバンと、クラスター爆弾によって右目を負傷した少女ハディールを軸に、バグダッド、アルグレイブ、サマワなどイラク各地を舞台に、戦火の中で懸命に生きる人びとの姿を丹念に紡ぐ。

撮影・監督：綿井健陽／製作・編集：安岡卓治『A』『A2』／翻訳：ユセフ・アブ・タリフ、重信メイ、勝元サラ／編集助手：辻井潔／企画協力：小西晴子／製作：安岡フィルムズ

ゲスト紹介

藤原 辰史 Fujihara Tatsushi

京都大学人文科学研究所・准教授。専門は、食の思想史、農業史、ドイツ現代史。おもな著書に、『ナチス・ドイツの有機農業』（柏書房、2005）（日本ドイツ学会奨励賞受賞）、『ナチスのキッチン』（水声社、2012）（河合隼雄学芸賞受賞）、『稲の大東亜共栄圏』（吉川弘文館、2012）、『カブラの冬』（人文書院、2011）など。「自由と平和のための京大有志の会」の声明文を起草。

自由と平和のための京大有志の会 声明文

戦争は、防衛を名目に始まる。
戦争は、兵器産業に富をもたらす。
戦争は、すぐに制御が効かなくなる。

戦争は、始めるよりも終えるほうが難しい。
戦争は、兵士だけでなく、老人や子どもにも災いをもたらす。
戦争は、人々の四肢だけでなく、心の中にも深い傷を負わせる。

精神は、操作の対象物ではない。
生命は、誰かの持ち駒ではない。

海は、基地に押しつぶされてはならない。
空は、戦闘機の爆音に消されてはならない。

血を流すことを貢献と考える普通の国よりは、
知を生み出すことを誇る特殊な国に生きたい。

学問は、戦争の武器ではない。
学問は、商売の道具ではない。
学問は、権力の下僕ではない。

生きる場所と考える自由を守り、創るために、
私たちはまず、思い上がった権力にくさびを打ちこまなくてはならない。

岡山大学文学部・プロジェクト研究「映像表現と人文学」について

写真や動画など映像表現が氾濫する21世紀において、「ことば」をもとに成立してきた人文学をいかに再構想するか。人文学のあらたな探究／表現の可能性を考える共同研究プロジェクト。「映像」を軸に、異なる専門分野のメンバーが学生と市民に開かれた実験的な企画を行う。